4. 文化の香り高いまちづくり

1.学校教育――――――山田小、黒中、給食センターを整備

学校施設はこれまで計画的に整備し、一応の水準に達していますが、今後は老朽化した校舎の改修、改築を中心に計画的に整備を進めます。63年度に山田小学校の増改築、64年度に山田小学校グラウンド用地の取得、中学校校舎の大規模改修、65年度に学校給食センターの増改築を行います。

2.社会教育――――――生涯教育の推進と史料館展示室の増設

生涯教育の視点に立ち、学習機会の充実を進めます。このため①学習情報の提供、相談事業の推進②生涯各時期における学習計画の策定③地域活性化学習活動事業の推進などを関係団体・機関との連携を深めながら、町民の学習意欲にこたえられる生涯教育体制の整備を図ります。具体的には成人・婦人対象の学級・講座の充実、自主グループ・サークルの育成と指導者の養成などを進めます。

また、文化財保護のため、63年度に史料館の展示室を増設します。図書館事業では、毎年度2,000冊前後の図書を購入し、図書館資料の充実に努めます。

3.スポーツ・レクリエーション――――――施設整備を着実に

①スポーツ施設の整備と提供②スポーツ大会の開催とスポーツ教室の充実③スポーツクラブの育成と指導者の養成を図り家庭・地域・行政が一体となったスポーツ振興を図ります。

(単位：千円)

	事業名	昭和63年度		昭和64年度		昭和65年度	
学校教育	小学校整備事業	山田小学校校舎増改築工事	329,412	山田小学校グラウンド用地取得	600,000	立仏小学校体育館増築工事	93,750
						給食センター改築工事	387,400
		小学校改修工事	11,291	小学校改修工事	12,000	小学校改修工事	12,000
	中学校整備事業			中学校校舎大規模改修工事	85,000		
		中学校改修工事	1,566	中学校改修工事	1,000	中学校改修工事	1,000
社会教育	史料館整備事業	史料館展示室増設工事	13,000				
	図書館事業	図書購入	2,200	図書購入	2,400	図書購入	2,600
	スポーツ施設整備事業	野球場フェンス張替工事	620	野球場フェンス張替工事	750	雨天練習場新設工事（野球）	20,000
		多目的広場整備工事	1,000	多目的広場整備工事	500	多目的広場整備工事	500

5. 健康で心ふれあうまちづくり

1.交通安全――――――年次計画で交通安全施設を整備

交通安全推進員制度の導入(63年度)、交通安全関係団体の育成、安全教育の強化などにより、町ぐるみの交通安全対策を進めます。また、ガードレール、カーブミラーなどの交通安全施設も年次計画により着実に整備を進めます。

2.消防・救急――――――消火栓の新設、ポンプ車の更新など

消防施設の整備では毎年度①消火栓を13～15基新設②小型動力ポンプを2台更新します。また64年度に広報車1台、65年度に消防ポンプ自動車1台をそれぞれ更新します。

防火のため①広報の充実②予防査察・立入検査の強化を図ります。

救急・救助体制については、円滑に運営できるよう医療機関との連携や搬送体制の強化を図ります。また、64年度に救助資材搬送車の整備としてトラック1台を更新します。

3.保健衛生――――――検診、相談、PR活動などの充実

妊婦と乳幼児を対象にした各種検診、相談事業などを充実し、母子の健康管理と健全な発育に努めます。

成人を対象とした総合検診などの各種検診もPRを強化し、早期発見に努めます。また、町民各自の健康管理PRのための健康展を引き続き文化祭にあわせて開催します。

4.環境衛生――――――生活環境向上のため自治会へ補助

健康で安全・快適な生活ができるよう、生活環境に対する監視を強め、公害の未然防止に努めます。高速道などの騒音・振動については道路公団などの関係機関へ防音壁の設置などの対策を要請していきます。

地域の公衆衛生向上のため、防疫薬剤・草刈機・動力散布機を各自治会で購入する際に補助します。また、家庭下排水溝の整備改善も補助を行います。

5.社会福祉――――――長寿祝金など老人福祉を充実

すべての町民が等しく幸せに暮らせるよう、老人・障害者など社会的弱者への相談事業や援助を社会福祉協議会とともに推進していきます。

児童福祉については、町保育所施設の整備充実、私立保育園への補助を今後ともすすめ、児童の健全育成に努めます。

老人福祉については63年度から長寿祝金の支給、シルバーホンの貸し出しを開始します。また、区画整理事業のため老人憩いの家「黒埼荘」を65年度から移転整備を行います。

(単位：千円)

	事業名	昭和63年度		昭和64年度		昭和65年度	
交通安全	交通安全施設整備事業	ガードレール280m・区画線5,000m・カーブミラー等40カ所	6,428	ガードレール330m・区画線5,000m・カーブミラー等40カ所	7,500	ガードレール350m・区画線5,000m・カーブミラー等40カ所	8,500
		交通安全広報板設置	345				
消防・救急	消防施設整備事業	小型動力ポンプ2台更新	1,704	小型動力ポンプ2台更新	1,704	小型動力ポンプ2台更新	1,704
		消火栓13基新設	5,740	消化栓15基新設	6,750	消火栓15基新設	6,750
				広報車1台更新	1,500	消防ポンプ自動車1台更新	9,800
	救急施設整備事業			資機材搬送車1台更新	5,000		
福祉	保育所施設整備事業	大野保育所プール改修工事	1,030	保育所改修工事	3,000	保育所改修工事	3,000
		寺地保育所屋上フェンス改修工事	414				
		黒鳥保育園プール建設補助	5,500				
	福祉施設整備事業					老人憩いの家改築工事	150,000

第7回

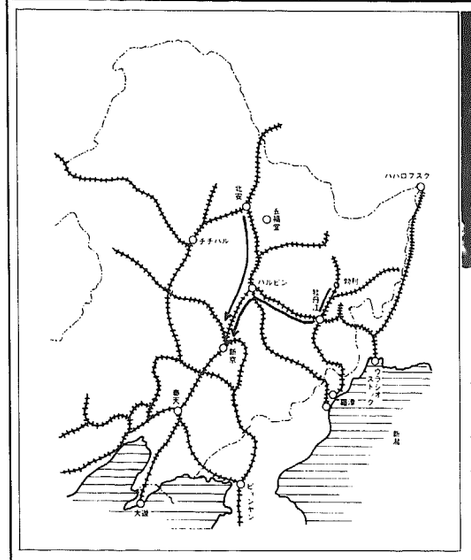
黒埼町の今昔

町史編さん課

満洲国移民の軌跡(六)

死んだとばかり思っていた姑ととしさん、劇的な再会をする。

昭和十年代、日本は大陸への移民を国策として、多数の人々を満州（現在の中国北東部）へ送り込んだ。しかし、太平洋戦争の勃発、日中戦争の激化によって満州へ移民した人々の暮らしは苦しくなっていった。そして、日本の敗戦。移民たちは故郷日本へ帰ろうとしたが、それは死と向かい合わせの苛酷なものだった。



上の写真／最近の山際としさん。帰国するだけで精いっぱいだったため、満州時代の写真は残っていないという。左地図／山際さん、斉藤さんそれぞれの帰国までの経路を示す。

ほとんど全滅といっていい状態になった佐渡開拓団を、としさんは仲間の女の人たちと脱出した。といっても、満州の地に安全な場所などあるはずはない。

現地人の家で冬を越す

としさんらはとある満人部落に入った。疲れ切って逃げることも歩くことも限界だった。飢えと疲労のため、何か食わせてくれと頼み込み、食べ物を恵んでもらった。また、食うためぜひ働かせてほしいと頼み込んだ。しかし、九月初めという時期は北満ではもう農作業のできない季節なので、いったん断わられた。そこを必死に積み込んで家事の手伝いなどをさせてもらいながら、置いてもらうことになった。

こうして、満人の家に置いてもらえなかったら、みんなは厳しい寒気の北満の冬を生き残ることができなかったろう。また、としさんがその年の暮れに病気になったときは、親切に看病してくれたという。

春になり、農作業が始まると、としさんらはその手伝いに精を出した。

二十一年の九月に近くなったころ、「開拓団員は日本へ帰されるらしい」という情報が流れ、としさんたちの耳にも入った。

思わぬ再会

さっそく「日本へ帰らせてほしい」と頼んだ。しかし、「日本はもう戦争に負けてなくなった」と受付けてくれない。それでも頼むと「病気になったのを直してやったのに恩を忘れたのか」とどうしても許してくれなかった。

ちょうどそのころ、八路軍の兵士がこの家へやってきて「どうして帰らないのか」ととしさんに聞いた。わけを話すと兵士たちはすぐに家の者に帰してやれと命じた。

八路軍の一言で暇をもらったとしさんは、すぐに勃利の引き揚げ者収容所に入った。そこでとしさんはまったく思いがけない人に会って、びっくりした。

それは、佐渡開拓団で亡くなったと思っていた姑テフさんの元気な姿だった。八人家族から一人ぽっちになってしまったとしさんにとって、こんなうれしいことはなかった。

引き揚げ者たちはここに一週間ほど滞在すると、牡丹江を越えてハルビンの花園収容所へ送られた。

ここでまた数日過ごした九月初め、正式の引き揚げ命令が出たことを知らされた。

各地の引き揚げ者は、新京に集められ、そこから引き揚げ列車が出るということだった。テフさんととしさんは、多くの引き揚げ者といっしょに新京の収容所に入った。

そこには方々から集結した多くのひとたちでごった返していた。

斉藤さんたちの昭和二十一年

一方、斉藤さんたちの方はどうであったか。

年が変わり、昭和二十一年。着のみ着のままでしのいだ厳寒も、暴動化した現地人の感情も、春が訪れるとともに温かくなってきた。

日本人も中国人の所へ日雇いとして働きに出かけた。中蒲原部落の人々も、子守り・炊事・日雇いと、当番で働きに出た。賃金が入ることで、ようやく人間らしい食べ物が食べられるようになった。人々の血色もよくなり、病弱者もようやく健康になってきた。

中国人の家へ働きにいくのはよかったが、立派な布団や日本人のものだった着物があると、横目でにらんで自分たちの姿と見くらべた。

また「日本には帰れないから、嫁に来ないか」とか「金を出すから、子供をくれないか」としつこく言い寄ってくる中国人がいた。女手一つで子供を育てる生活の限界に負けたのか、中国人に子供をくれたり、子供を連れて中国人に嫁いだ日本人もいた。

そんな生活を続けるうち、九月も末近くなって、帰国の話が伝わってきた。

「本当に日本へ帰れるね、生きていてよかった」と婦人たちは今までのことを忘れて喜びあった。いざ帰るとなると、永住覚悟で渡満して、六年余、荒れ地を切り開いて作った肥沃な農地、共に築いた部落との別れはつらかった。複雑な気持ちを抱きながら、通北駅前に集まった。すぐに汽車に乗れると思ったが、一週間近く待ってようやく、汽車が来た。その間、駅前のコンクリートの土間の共同宿舎で過ごさねばならなかった。

汽車は着いたものの、中国官憲によって帰国、残留の二組にわけられた。幸いスイノさん一家三人は帰国組に入れられたが、区長の塩田さん一家は残留組とされた。塩田さんはなんとか家族を帰国組に入れさせたが、自身は残留させられた。

協力・山際としさん、斉藤スイノさん、塩田誠さん　執筆・宮田栄門